學界展望

中國古代の農耕儀禮と王權

岡村秀典

一　考古學の新しい方法

中國の古代では、祭祀儀禮が社會を秩序づける重要な役割を擔った。考古學では日常生活には用いないような道具を祭器や禮器とみなし、その形や出土狀況をもとに祭祀儀禮を研究する。しかし、祭祀儀禮が遺址や遺物として殘されるのは、一連の行爲の一斷面であって、發掘という偶然によって明らかにできるのは、さらにそのごく一斷片にすぎない。とりわけ祭器や禮器と考えられる玉器や靑銅器は、ほとんどが墓の副葬品であり、それ以外の儀禮の實態を明らかにすることはむずかしい。このため考古學の關心はもっぱら編年などの基礎作業に向けられ、その枠組みをこえて議論されることはあまりなかった。古代にはどのような祭祀や儀禮がおこなわれ、それぞれの場で祭器や禮器がどのように用いられていたのかは、その內容を記した銘文や古典籍によって研究する以外に方法はなかったのである。

そのなかで兪偉超・高明〔一九七八～一九七九〕が、周代の墓に副葬された銅鼎の數に着目し、古典籍にみえる用鼎制度に照らし合わせて身分秩序とその變化をとらえようとしたのは、古典籍の機械的な附會に問題があったとはいえ、歷史學にたいする考古學の數少ない貢獻のひとつであった。

從來のような祭器や禮器を對象とした研究ではなく、本稿は祭祀儀禮の場で消費される穀物・酒・動物（犧牲）に着目する。玉や銅でつくられた祭器や禮器はくりかえし使用が可能な資本財であり、こんにちまで原形をとどめたまま遺存してきた。美術品としての價値も高く、多くの人びとを魅了してきた。これにたいして、それら有機物は消費されずに殘ったとしても土中で腐朽し、考古資料として研究者の注意を引くことがなかった。ところが近年、植物考古學や動物考古學など歐米の新しい研究方法が中國に導入され、これまで看過されてきた動植物遺體の分析が精力的にすすめられるようになった。その方法論がもとづく人類學や生態學の理論はまだ十分に咀嚼されていないものの、すでにいくつかの刮目すべき分析データがあらわれている。ここでは古代の農業と祭祀儀禮にテーマをしぼり、文獻學・人類學・農學など關連分野の知識を援用して、こんにちまでの到達點と今後の展望を示しておきたい。

まず、消費財を對象とするねらいは三つある。第一に、祭祀儀禮の場で消費される動植物は、人が生きていくために必須の食糧であり、農業を基礎に成立した古代國家の經濟基盤となる農產物であった。そこで、權力がいかにその生產・流通・消費をコントロールしていたのかが、祭祀儀禮と權力とのかかわりを解明する重要な鍵となる。第二に、鑑定された植物種子を古典籍にみえる

品種に同定することは、いくつかの文字の解釈が分かれているためむずかしいが、鑑定された動物骨を古典籍にみえる動物に同定すること、たとえば出土の「ウシ」骨と古典籍の「牛」とが同一種に屬していることは、ほぼまちがいないだろう。このため王―諸侯―卿大夫―士の身分制を前提に祭祀儀禮で用いる犠牲の種類を序列化している禮書の記述が、實態をあらわしたものか否かを出土動物骨によって檢證することが可能である。それは用鼎制度論のように鼎を用いた葬送儀禮に限定されることなく、犠牲を用いた多くの祭祀儀禮を對象にできるという利點がある。第三に、動植物の種類と生態的特性は時空閒をこえた普遍性をもっている。ウシは中國でも歐米でもウシであり、同じ生物學的特徴をもち、同じような生態環境に適應しているから、動植物利用の人類學として時空閒をこえた通文化的な比較研究ができる。それは特定の地域と文化の所產である祭器や禮器との大きなちがいである。

本論にはいる前に、まず古代の祭祀儀禮を定義しておこう。考古學では「祭祀」「儀禮」「祭禮」「祭儀」などの概念が、十分に定義されないまま混用されているからである。參考になるのは、『周禮』大宗伯のあげる吉禮・凶禮・賓禮・軍禮・嘉禮の五禮である。吉禮とは、天神・地祇・人鬼（祖先）をまつる祀・祭・享の儀禮で、狹義の祭祀にあたる。祖先祭祀の享は季節ごとにおこなわれ、天神・地祇の祭祀をふくめて時期があらかじめ決まっている。これにたいして凶禮・賓禮・軍禮・嘉禮は不定期の儀禮である。凶禮とは死者にたいする喪葬儀禮のこと。考古學では葬送儀禮をしばしば祭祀にふくめているが、墓への埋葬が完了し、死者が祖先神に昇華してはじめて吉禮としての祖先祭祀が宗廟でおこなわれるのである。後漢時代になって墓祭の風習がひろがるけれども、臨時の凶禮としての喪葬儀禮と定期的な吉禮としての墓祭とを混同すべきではない。賓禮とは、諸侯が王に朝覲したり、諸侯が會同したりするときの儀禮。軍禮とは軍事にかかわる儀禮、嘉禮とは冠婚や饗宴などの儀禮をいう。要するに、社會生活のすべてにかかわる儀禮が五禮であり、そのうち農耕儀禮より派生して定時におこなわれるようになった祭祀が吉禮、そのほかの四禮が臨時におこなわれる儀禮であった。ただし、この五禮ですべての祭祀儀禮が説明できるわけではない。『周禮』大司馬は、軍事教練をかねた狩獵を季節ごとにおこない、狩りの獲物を神がみにささげる祭祀が最後にともなっていたことを記している〔小南一九九七〕。また、戰國時代の祭禱のように、個人の安寧を祈願して神がみに犠牲をささげる臨時の祭祀がおこなわれたからである〔岡村二〇〇五a：四四六～四六四〕。

本論では農耕儀禮から生みだされた定期的な祭祀をおもに檢討するが、凶禮・賓禮・軍禮・嘉禮などの儀禮と異なるところがもうひとつある。それは祭祀が人と神とのコミュニケーションの手段であるのにたいして、そのほかの儀禮は、神が介在することがあったとしても、人と人との關係が前提となっている。そして儀禮は祭祀を包括する上位概念であり、祭祀を論じるときには祭祀對象である神をつねに考慮する必要があろう。

二　農事暦と祭祀儀禮

中國の古代社會は農業を基礎として成立した。乾燥した黄河流域ではアワやキビなど雜穀の畑作、雨の多い長江流域では水田稻

作がおこなわれた。紀元前二千年紀にダイズが栽培化され、雑穀・イネ・ムギと組み合わせた五穀の輪作がはじまると、華北の農業生産力は飛躍的に向上した〔岡村二〇〇三：一六九～一七六〕。冬コムギなど後世に出現した品種をのぞけば、五穀のすべては夏の高温多雨を利用して栽培されるため、春に種をまき、秋に収穫される。豊饒を祈り豊作を祝う農耕儀禮は、この農事暦から生みだされたのである。グラネ『中國古代の祭禮と歌謠』の先驅的な研究を受けて、わが國でも谷口義介が『詩經』豳風・七月の生活誌を復元している〔谷口一九八八：二八～六三〕。夏暦二月には村の社で羔と韭をささげた春のまつり、十月には羔羊を殺して朋酒をふるまう饗宴が催された。豳は黄土高原に隣接した土地にあり、ヒツジの牧畜がさかんであった。それより温暖な中原の農村では、おもにブタが飼養され、農事暦はひと月ほど早かったであろう。作物の品種によっても、農作業がひと月ぐらい前後したかもしれない。しかし、春に種をまき、秋に収穫するカレンダーは、ひろい中國といえども大同小異であった。

儀禮で缺かせないのが酒である。古代の酒は、日本酒と同じように穀物をアルコール發酵させた醸造酒で、どぶろく（濁り酒）に近いとされる。前四千年紀に杯と米を蒸す甑とが出現するから、そのころには酒がさかんにつくられていたらしい。それは原料となる穀物に相應の餘剰があったことを暗示する。

いまでこそ酒は一年を通じて手にはいるが、それは醸造と貯藏の過程で雑菌による腐敗を防ぐ工夫がなされているからである。そのような技術のなかった古代では、酒は長期間の保存がむずかしく、數日で速成する醪をのぞけば〔林一九七五〕、酒造りと飲酒儀禮の季節はおのずと固定せざるをえなかった。『詩經』豳風・七月には「十月は稻を穫り、この春酒をつくり、以て眉壽をいのる」とあり、後漢代の歳時記『四民月令』は、夏至・初伏のまつりに用いる春酒を正月に醸し、冬至のまつりや十二月の臘祭に用いる冬酒を十月に醸すという。崔寔『四民月令』はいまの河北省から河南省あたりの農業を記しているから〔渡部一九八七〕、『詩經』豳風よりもやや温暖なところの農事暦である。また、雑穀は收穫期が少し早いため、『說文解字』一四下「酉」には「八月に黍（キビ）なり、酎酒をつくるべし」という。酎酒は仕込みを何度かくりかえした濃い酒〔林一九七五〕。いずれの酒にせよ、原料となる米と麴の準備→蒸し米→仕込み→搾りという酒造りの過程において夏場の高温をさける必要があり〔秋山一九九四：三八～七七〕、酒を醸す時季はおのずと限定された。それは新米を用いて神酒をつくる理由づけになり、農閑期で勞働力が確保しやすいという利點もあった。

考古學では、土器に附着した物質から酒の原料を分析する研究がはじまった。龍山文化の山東省兩城鎮遺址から出土した土器について米國と中國の研究者が共同で化學分析したところ、酒の微量元素が檢出され、イネ・蜂蜜・果物を原料にした醸造酒という結果がでた〔麥戈文ほか二〇〇五〕。この遺址ではアワ・キビなどの雑穀も栽培されていたが、酒の原料にはもっぱらイネが用いられていたのである。分析の信頼性についてはさらなる檢討が必要だが、考古學から酒を論じる可能性が開かれたことを喜びたい。

酒の賞味期限と飲み方にかんして、考古學で注意すべきことがある。二里頭文化に出現する爵など青銅製の酒器はすべて加熱用

の器種であり、飲酒用の觚は土器や漆器が用いられた。それは青銅器が土器よりも加熱に適していたからだが、かつての日本酒のように、當時の酒は甘味がなくて酸味が強く、とくに時間がたつにつれて雑菌が繁殖して味が悪くなるため、「火入れ」によって滅菌したり、燗によって口當たりをよくしたことも、青銅酒器の出現をうながした一因であったと考えられる。『周禮』春官に「鬱人」「鬯人」があり、鬱草などで香りをつけた酒が祭祀儀禮で用いられたのも、おそらく酒そのものの風味が芳しくなかったからであろう。

賞味期限の短いことは肉も同じである。肉を食べるには、その動物を殺さなければならない。干し肉や鹽漬けなどの保存方法がすでにあったとしても、寒冷なところでなければ長期保存はむずかしい。いったん動物を殺すと、成年のブタなら一頭一〇〇キログラム以上の肉があり、一部を保存用にとっておくとしても、ブタを飼っている世帯だけで食べきれる量ではない。このため、日常的に肉を食べるこんにちとはちがい、饗宴など特別な儀禮のときでなければ肉を食べることはなかった。また、ブタやヒツジは春先に子を産む。子は一年足らずで成長し、それ以上は飼料をいたずらに消費するだけだから、冬をむかえるころには繁殖に不用な家畜のオスを殺して食べてしまうのが經濟的である。したがって、ブタを飼っている農耕社會でも、ヒツジを飼っている牧畜社會でも、冬には家畜の肉を共同體成員にふるまう饗宴が盛大にとりおこなわれるのである。『詩經』豳風・七月には羔羊を殺して朋酒をふるまう饗宴が十月に開かれたとあり、『四民月令』には十二月の臘祭に用いる干し肉を十月に準備し、冬至のまつりや臘祭のときには豕や羊を殺すという。いまも中國の農村では、家ごとに飼っているブタの子を殺して一家全員で春節をむかえているが、それはこのような動物の生態と經濟性とを勘案した農事暦であった。

考古資料の一例をあげておこう。山西省天馬・曲村遺址は、西周時代から春秋時代にかけての晉の國都である。そのJ三・J四區では、動物を生き埋めにした五八基の犠牲坑が發掘された〔北京大學考古學系商周組ほか一〇〇〇〕。いまみたような饗宴の犠牲ではなく、家畜をそっくりそのまま生き埋めにした犠牲坑で、ウマ坑は一一基、ウシ坑は一七基、ヒツジ坑は二〇基、未鑑定の坑は二基、動物骨のない坑は八基である。空坑は肉だけをいれたのだろう。食肉用としてふつうに飼われていたブタがまったく用いられず、ウマやウシという軍事に有用な大家畜が多く用いられていることから、上位の貴族が主催した祭祀であり、惜しげもなく生き埋めにする損失の大きさからみて、前五世紀の晉をおおった内亂など、相應の社會的・宗教的動機があったものと考えられる。そこで注意したいのは、犠牲の埋められた季節である。哺乳類は齒の萌出度をみることによって細かく死亡の月齢が鑑定でき、ウマはすべて九～一二か月齢、ウシは一頭が一〇か月齢、ほかの一六頭が六～七か月齢、ヒツジは鑑定できた例が少ないが、一〇～一二か月齢が四頭、一四か月齢が二頭、二四か月齢が三頭と鑑定された。報告者はそれ以上に考察していないが、ウマとヒツジは春先に出産するのがふつうだから、成熟度の個體差や鑑定の誤差などを勘案しても、犠牲のほとんどは、生まれてから一年未満の、およそ冬から春にかけての季節であったと考えられる〔岡村

二〇〇五a：四二四～四四六〕。それはちょうど冬至のまつりや臘祭と時季が同じである。共同體の農耕儀禮を利用して、支配者がおこなった祭祀であったのかもしれない。

農耕儀禮に用いられる穀物・酒・動物は、その生物學・農學的特性から、生産と消費の季節が限定された。ここではおもに中國古代を例にみたが、その方法的視角は、時空間をこえて、ひろく農耕社會に一般化できるだろう。

三　王權による農耕儀禮の再編成

中國の古代王權を表象する考古資料としてこれまで着目されてきたのは、都市・宮殿・文字・玉器・青銅器などである。わたしも河南省二里頭遺址の宮殿・玉器・青銅器から宮廷儀禮を復元し、王權の成立と中國文明の誕生を論じた〔岡村二〇〇三〕。ここでは前章までの議論をふまえて、そうした王權がどのように農業をコントロールしたのか、それによって農耕儀禮がどのように再編成されたのかを考えてみたい。

陝西省の扶風縣と岐山縣にまたがる周原遺址は、周王朝の發祥地である。**表1**はその王家嘴地點で前三千年紀後半の龍山文化と前二千年紀後半の先周文化（殷後期併行）とについて土壌試料から採取した植物種子の分析データである〔周原考古隊二〇〇四〕。兩時期ともアワが過半數を占める、もっとも主要な作物であった。しかし、兩時期の間に大きな變化が生じている。第一に、キビ亞科の比率が龍山文化では四五・九％を占めたのにたいして、先周文化では九・七％に激減している。キビ亞科とは、栽培種のアワやキビと比べて粒の小さな禾本科の雜草のこと。龍山文化では集落にもちこまれた種子の半數近くが雜草だったのである。同時代の巨大な城郭集落の山西省陶寺遺址では雜草が二一％とやや少ないが〔趙・何二〇〇六〕、山東省兩城鎮遺址ではそれが四七％に達している〔克勞福德ほか二〇〇四〕。農耕の初期段階では、栽培種と野生種とが交雜し、開花のときまで種が判別できないことも多いから、龍山文化はまだそのような粗放な農耕だったのだろう。これにたいして先周文化には雜草が激減し、品種の選擇と除草による集約的な農耕がはじまったと考えられる。第二に、龍山文化ではアワ以外の作物がきわめて少なかったが、先周文化にはキビ・コムギ・ダイズが一定量を占めている。これは連作障害を避けるために、效率のよい輪作がすすめられるようになったことを示している。また、キビの増加は、古典籍にみるようなキビ酒

表1　陝西省周原王家嘴遺址の植物種子

	龍山文化		先周文化	
	個體數	%	個體數	%
アワ	5826	50.5	583	63.0
キビ	160	1.4	94	10.1
コムギ	1	0.0	120	13.0
ダイズ	122	1.1	37	4.0
イネ	5	0.0	0	0.0
キビ亞科	5293	45.9	90	9.7
マメ科	115	1.0	1	0.1
その他	10	0.1	1	0.1
計	11532	100.0	926	100.0

の嗜好が高まったことを暗示する。このような農耕の集約化と效率的な輪作のはじまりが、支配者の強權によるものかどうかはともかく、それによって農業生產力が飛躍的に高まり、周王朝の創業を支える經濟基盤となったことはまちがいない。しかも、周原は『詩經』豳風・七月の舞臺に近く、その農事詩を考えるうえでも、これは貴重な分析データであろう。

かつてウィットフォーゲル〔一九九一〕は大規模な治水灌漑農業にともなう集團勞働が專制的な國家を生みだしたと考えた。しかし、中國では禹の治水のような神話をのぞけば、大規模な水利事業をものがたる證據がほとんどない。かわりに文獻學で注目されたのが藉田儀禮である。それは正月に王が上帝に豐作を祈念し、吉日をえらんで王が公卿・諸侯・大夫らを引き連れて藉田を耕す儀禮のことである（『禮記』月令）。藉田で收穫した神米は秋の祭祀に供され、それで神酒が釀された。『詩經』にはそうした農事詩が豐富にあり、殷墟卜辭にも藉田の記事とみられるものがあって、農業共同體の祭祀や共同備蓄のための「公田」を集團で共同耕作したことにはじまると考えられている〔大嶋一九六〇／白川一九八一／谷口一九八八／佐竹一九九二〕。漢代には文帝三年正月に「それ農は天下の本なり。それ藉田を開き、朕はみずから率いて耕し、もって宗廟の粢盛に給せん」という詔が下され（『史記』文帝紀）、皇帝が主催する農耕儀禮の規範となった。大規模灌漑の證據がなく、このような共同體祭祀にはじまる農耕儀禮からみると、王權の宗教イデオロギーが大規模な農業の組織化をうながしたと考えるのが妥當であろう。植物種子の分析データからみた農業の革新も、それと連動した變化であったにちがいない。

藉田儀禮のような春の田耕ではないが、收穫時の集團勞働をうかがわせる考古資料がある。殷前期のみやこ河南省鄭州城の木材公司遺址では、二里岡上層期の坑から一九點の石鎌が土器にはいった狀態で出土した〔河南省文物研究所鄭州工作站一九八四〕。殷後期のみやこ河南省殷墟の小屯北遺址でも長方形坑（E一八一）から四四四點にのぼる石鎌（いわゆる石刀）が一括出土した〔石一九三三／李一九五一〕。いずれも收穫具を意圖的にまとめて埋めたものであり、殷王の主導のもと、神に豐作を感謝する集團的な收穫儀禮がおこなわれたと推測される。

王權と農耕儀禮を考えるとき、田租の起源も重要である。田租は祭祀のために收穫物が奉獻されたことにはじまり、やがて支配者がそれで自分たちの祖廟をまつり、王朝の財政に轉化したとされるからである〔宮崎一九五七：一〇三～一三〇〕。「宗廟の粢盛に給せん」とする文帝の詔はそれを明言したものであり、「租」字が「祖」「俎」「胙」など祭祀關係の文字と類似することからも裏づけられる。そうした田租のはじまりを考古資料から檢證することはむずかしいが、王室が飼養している犧牲用の牧草が、租稅のひとつとして徵收されたことは、以下の議論において重要な意味をもつ。すなわち『禮記』月令にいう。

この月（六月）には四監（山林川澤の監督者）に命じて畿內の百縣から牧草を大いに集め、それで王室の犧牲を飼養する。そして民衆に命令して、すべての者に勞力を供出させ、皇天上帝や名山大川や四方の神がみに犧牲を捧げ、宗廟や社稷の靈たちを祀り、民衆のために幸福を祈るのである。

『尙書』禹貢には都から三百里までの地域では賦として藁を納め、

それにともなう雑役の規定があった〔小南一九九七〕。秦代の湖北省睡虎地一一號墓や前漢前期の湖北省江陵鳳凰山一〇號墓から出土した簡牘は、縣ごとに飼養された馬・牛・羊の飼料として芻藁税が課せられていたことを記している。『禮記』月令にみえる牧草の徴收は、このような芻藁税に先行する田租であったのだろう〔岡村二〇〇五a：三九二～三九八〕。

農耕儀禮で供される犧牲の種類も、龍山時代と殷周時代との間で大きく變化した。詳しくは拙著〔岡村二〇〇五a〕をみていただくとして、その概略をここで紹介しておこう。

まず、ゴミ坑や地層から雑然と出土する動物骨は、人びとが肉を食べて捨てた殘滓で、その構成比をみると、龍山文化ではほとんどの遺址でブタがもっとも多く、ついでシカ、イヌの順である。ブタとイヌは人の殘飯や米ぬかなどを飼料とし、身近に飼うことができる。これにたいしてシカは、多くが狩獵の獲物である。集落の近くにシカの生息する森林があり、狩りの腕前さえあれば、家畜を飼う手間が省けるだけでなく、田畑が荒らされるのを防ぐ效果も大きい。このため龍山時代の農村では、食肉用のブタを飼うかたわら、シカの狩獵もさかんであった。その生業は殷周時代になってもかわらなかった。とりわけ森林の豊かな長江流域の農村では、殷周時代にブタの畜産を縮小し、狩獵漁撈に大きく依存するようになったのである。『周禮』職方氏に「揚州と荆州では家畜を飼育せず、もっぱら稻を栽培する」といい、『漢書』王莽傳に「荆州と揚州の民は山や澤に依存して漁撈や採集を生業としている」という生活は、前二千年紀にはじまった。これにたいして中原における殷周時代の都市では、野生動物の比率はわずかである。代表的な遺址の動物骨構成比をみると（**圖1**）、殷前期の鄭州二里岡と殷後期の殷墟苗圃北地とは王都で、ともにウシが過半を占める。兩遺址とも一五〇〇點をこえる大量の動物骨が出土し、消費量も突出している。殷墟の宮殿區に位置する花園莊南地

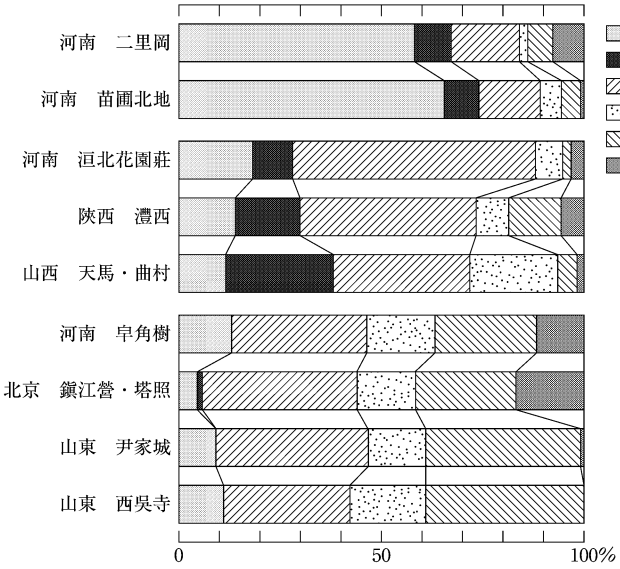

圖1　黄河中下流域における殷周時代の肉消費パターン

では、長徑三九mの大きな坑H二七から三〇萬點近い動物骨が出土し、その九八%以上がウシであった。また、殷前期から殷後期への過渡期にあたる河南省洹北花園莊、殷末から西周末期までの陝西省灃西、西周から春秋時代の山西省天馬・曲村の三遺址は王都・國都の一角にあり、ブタがもっとも多く、ヒツジやウシも一定の比率を占める。これにたいして、河南省阜角樹、北京市鎭江營・塔照、山東省尹家城、同西吳寺の四遺址は農村で、ブタとシカの多い構成比は近似する。要するに、ブタの飼養とシカの狩獵とで主たる食肉をまかなっていた農耕社會がひろがるなかで、殷代にウシをおもに消費する王都やブタを主とする家畜に大きく依存する王都・國都が出現したのである。

遺址からはまた、動物の全身骨がしばしば出土する。なにかの原因で死んだ家畜を遺棄したような例もあるが、足を縛った狀態のもの、土をつき固めて埋めたもの、人といっしょに埋めたものなどは、祭祀の犧牲として意圖的に全身を埋めた可能性が高い。そのような犧牲は、新石器時代から二里頭時代まではブタがもっとも多く、イヌがそれにつぐ。しかし、殷代にはウマ・ウシ・ヒツジが多くなり、ブタとイヌは春秋時代にはほとんど消失する。シカなどの野生動物はどの時代も例が少ない。狩獵の獲物は全身を神にささげるような祭祀には用いなかったのである。また、二里頭時代までは集落内の貯藏穴や井戸を供犧に再利用しているが、殷代になると祭祀用の長方形坑が出現し、多數の坑が整然と配列されるようになる。殷後期のみやこ殷墟小屯と西北岡ではウシ・ヒツジ・イヌ・ウマ・人を犧牲にした夥しい數の坑が發掘され、甲骨卜辭にみえる大規模な王朝祭祀を彷彿とさせる。春秋後期になると、秦公の宗廟と考えられる陝西省馬家莊ではウシとヒツジが主で、晉のみやこ山西省侯馬で發見された三五〇〇基あまりの犧牲坑は五八%がヒツジであった。このように殷周時代は犧牲の種類と規模において前代から大きく變化したのである。

殷代に供犧が大きく變化したことは、神意を占う卜骨の材料からも裏づけられる。龍山時代から二里頭時代までの卜骨はブタやヒツジが多かったのに、殷前期には一轉してウシがおもに用いられるようになる。同時に卜骨の數が桁ちがいに激增する。殷前期の鄭州二里岡では一九五二・五三年の二年間に出土した卜骨の總數は七八七點で、そのうちウシは八八%を占める。殷後期の殷墟で一九九一年までの四二年間に出土した卜骨は一一五七九點におよび、そのほとんどがウシであったという〔劉一九九七〕。いずれも破片をふくめた數字だが、肩胛骨は一頭の動物につき二點しか採取できないから、數千頭にのぼるウシが王朝の占いのために殺されたことは確かであろう。

雜食性のブタは一年に數頭から一〇頭前後の子を產むのにたいして、草食性のウシ・ヒツジ・ウマは年一回の單胎がふつうである。ただ食肉に消費するのであれば、ブタはもっとも經濟效率が高く、大家畜のウシとウマはもっとも經濟效率が悪い。しかも、ブタは農業の副業として集落内で戶別の小規模な畜產が可能であるが、群れをなすウシ・ヒツジ・ウマはひろい牧草地をかかえた專業的な牧畜經營のほうが好ましい。新石器時代の食肉と祭祀においてブタが優位にあり、こんにちまでブタ肉が中華料理の中心的な食材になっているのは、中國農耕社會におけるブタの經濟性に理由がある。これにたいしてウシ・ヒツジ・ウマは數十頭から

百頭單位で飼われることが多く、殷周時代の支配者がそれらを惜しげもなく消費できたのは、その供給を可能にする大規模な牧場經營をはじめていたからにほかならない。逆にいえば、大規模な牧場經營が成立してはじめてウシ・ヒツジ・ウマの供犧が可能になったのである。そうした經濟のしくみが成立したのは殷代であり、ブタを戸別に飼って自家消費する農村とウシ・ヒツジ・ウマを大量に消費する都市との格差が明確になった。殷王朝は祭祀儀禮を目的として財の生産と蕩盡をおこない、祭主としての權威をいっそう高めたのである。

禮の基本理念のひとつに王―諸侯―卿大夫―士という身分秩序がある。犧牲についてみると、王・諸侯は牛・羊・豕（この三種を大牢という）、卿大夫は羊・豕（この二種を少牢という）、士は豕を用いることができた。すなわち、犧牲には身分に對應する牛―羊―豕の序列があり、もっとも尊重された犧牲が牛であった。そして、天地神の祭祀は王だけがおこない、犧牲に用いる牛は王が直接その飼養を管轄した。『禮記』祭義はつぎのようにいう。

むかしは天子・諸侯のもとには必ず家畜を飼養する役人がいた。祭祀の犧牲を選ぶ季節がくると、君主は齋戒沐浴してその牧場を臨檢した。祭祀に用いる各種の犧牲は必ずそこから選別されたのであり、これも敬虔な氣持ちのあらわれである。君主はそこで牛を召しいれて點檢し、その毛を選び、卜占にかけて、吉とでてはじめてその牛を特別に飼養したのである。供犧に用いる牛の飼養は君主の重要な職務であった。殷墟卜辭にも殷王が牛の飼養を省察したことが記され、王權にとって犧牲に用いる牛の飼育がいかに重要であったかがよくわかる。『詩經』小雅・無羊は、三〇〇頭の羊と九〇頭の牛を放牧し、三〇種類の毛色の犧牲がそろっている大規模な王室の牧場を描いている。また『春秋左氏傳』閔公二年條には、齊侯が衞の君主を立てたとき、馬四匹、祭服五着、牛・羊・豕・鷄・狗それぞれ三〇〇頭ずつを贈ったという。それは家畜の大規模な飼養が國の存立にとっていかに重要であったのかをものがたる〔岡村二〇〇五b〕。

このような大規模な牧畜だと、飼料の牧草が大量に必要となるため、支配者はそれを租稅のひとつとして徵收したのである。さきにみたように、王は人びとから徵收した芻藁で犧牲を飼養し、人びとに勞力を供出させ、みずからは宗廟や社稷の祭祀をおこなって人びとの幸福を祈った、と『禮記』月令はいう。藉田儀禮と同じように、供犧にかかわる貢納と勞働奉仕はもともと共同體の農耕儀禮としてはじまったのであるが、王權が誕生し、王朝祭祀を目的とした大規模な畜産がはじまることによって、やがて租稅や勞役という國家の收奪に轉化していったのであろう。もっとも農業共同體の儀禮はそのまま存續したから、正確にいえば、傳統的な農耕儀禮のなかから王朝祭祀が成立したことになる。そのような王權による再編成はいつか、古典籍からはわからなかったけれども、以上のような考古學の新しい方法によって、殷代に大きな轉機があったことを明らかにしたのである。

王權によって再編成された農耕儀禮は、甲骨卜辭にみるような天・地・祖先神の祭祀に組みかえられ、『詩經』の農事詩もまた祖先祭祀と結びついた饗宴を描寫している。しかし、農耕儀禮はもともと動植物の生態にもとづいているから、太陽神や土地神などの祭祀と結びつくことがあっても〔林二〇〇二〕、原初から祖

先祭祀と結びついていたかはわからない。殷周時代における祖先祭祀は、王系や家系の形成とかかわって身分秩序の順に成立し、卿大夫層でも記憶の範圍をこえて數世代さかのぼる祖先をまつるのは戰國時代になってからである〔岡村二〇〇六〕。まつられる神はなにか、向後の課題としたい。

參考文獻

秋山　裕一　一九九四『日本酒』、岩波新書

ウィットフォーゲル（湯淺赳男譯）一九九一『オリエンタル・デスポティズム』、新評論

大嶋　隆　一九六〇「耤田考」『甲骨學』第八號

岡村　秀典　二〇〇三『夏王朝　王權誕生の考古學』、講談社

岡村　秀典　二〇〇五a『中國古代王權と祭祀』、學生社

岡村　秀典　二〇〇五b「殷周時代における畜產の國家的編成」『國家形成の比較研究』、學生社

岡村　秀典　二〇〇六「禮制からみた國家の成立」『東アジア古代國家論』、すいれん舍

河南省文物研究所鄭州工作站　一九八四「近年來鄭州商代遺址發掘收獲」『中原文物』第一期

克勞福德ほか　二〇〇四「山東日照市兩城鎮遺址龍山文化植物遺存的初步分析」『考古』第九期

小南　一郎　一九九七「石鼓文製作の時代背景」『東洋史研究』第五六卷第一號

佐竹　靖彥　一九九二「藉田新考」『中國の都市と農村』、汲古書院

周原考古隊　二〇〇四「周原遺址（王家嘴地點）嘗試性浮選的結果及初步分析」『文物』第一〇期

白川　靜　一九八一『詩經研究　通論篇』、朋友書店

石　璋如　一九三三「第七次殷虛發掘：E區工作報告」『安陽發掘報告』第四期

谷口　義介　一九八八『中國古代社會史研究』、朋友書店

趙志軍・何駑　二〇〇六「陶寺城址二〇〇二年度浮選結果及分析」『考古』第五期

林　巳奈夫　一九七五「漢代の飲食」『東方學報』京都第四八册

林　巳奈夫　二〇〇二『中國古代の神がみ』、吉川弘文館

麥戈文ほか　二〇〇五「山東日照市兩城鎮遺址龍山文化酒遺存的化學分析」『考古』第三期

北京大學考古學系商周組・山西省考古研究所　二〇〇〇『天馬——曲村』、科學出版社

宮崎　市定　一九五七「古代中國賦稅制度」『アジア史研究』第一、同朋舍

兪偉超・高明　一九七八～一九七九「周代用鼎制度研究」『北京大學學報』哲學社會科學版一九七八年第一期・第二期・一九七九年第一期

李　濟　一九五一「殷墟有刃石器圖說」『國立中央研究院歷史語言研究所集刊』第二三本

劉　一曼　一九九七「安陽殷墟甲骨出土地及其相關問題」『考古』第五期

渡部　武　一九八七『四民月令——漢代の歲時と農事』、平凡社東洋文庫